4/22/2008

＊キリスト教学演習　（宗教と科学）　＊＊＊＊　　S.　Ashina

＜前回＞オリエンテーション

Ａ．テーマ：宗教と科学の関係論構築に向けて――パネンベルク（１）――

Ｂ．演習の目的

Ｃ．テキストについて

Wolfhart Pannengerg, *Natur und Mensch ---und die Zukunft der Schöpfung*,
Vandenhoeck & Ruprecht,　2000.

Ｄ．パネンベルク（**Wolfhart Pannenberg 1928.10.2 －，　シュテッティーン生まれ**）

ドイツの神学者、組織神学

Alister E. McGrath, Pannnennberg, in:Alister E. McGrath(ed.), *The Blackwell Encycloprdia of Modern Christian Thought*, Basil Blackwell, 1993, pp.420-422.（プリント）

Ｅ．授業（予習＋出席・発表＋復習）の進め方

１．テキストの扱い方

２．演習参加者の役割

・担当者：(1)授業前：読み・訳す・分析する　→　レジュメ作成
要旨・問題点・補足事項
(2)授業での発表：内容の説明と議論すべき問題の提供
(3)授業後：まとめ　→　プロトコール（前回の確認と補足）

・担当者以外：テキストの分析
議論への参加

Ｆ．成績について

演習担当　→　平常点

序論：パネンベルクと科学論

（１）「宗教と科学」関係論への関わりとその問題圏

１．Vorwort より

・「創造論と自然科学」をめぐる諸論考の執筆・発表の経緯あるいは背景

・ドイツにおける自然科学者と神学者の討論サークル（1950・60 年代から）
偶然性概念、神と空間、場の概念と聖霊
物理学的宇宙論

・最近の動向・多面的な展開の中で
フランク・ティフラーとの対論
進化論の問題

Richard Dawkins, *The God Delusion*, 2006.（『神は妄想である』早川書房）

Alister E.McGrath and Joanna Collicutt McGrath, *The Dawkins Delusion?*,2007.

・人格あるいは自己の問題（心・神経科学）、人間学、神の像

・人間に関わる個別的諸問題
　　罪、暴力、兵役拒否、国家、法

・人間存在と宗教、人間進化と宗教
　　人間本性、人間は本性的に宗教的？　宗教の多元性
cf. フォイエルバッハ問題

・終末論、人間と被造物の未来の完成と現在の不完全さ
　人間学的なアプローチ
　カール・レーヴィットへの反論

２．Wolfhart Pannenberg, *Toward a Theology of Nature. Essays on Science and Faith*（ed. by Ted Peters）, Westminster/John Knox Press, 1993. （『神と自然――自然の神学に向けて』教文館）

Theological Questions to Scientists（1981）
The Doctrine of Creation and Modern Science（1989）
God and Nature（1983）
Contigency and Natural Law（1970）
The Doctrine of the Spirit and the Task of a Theology of Nature（1972）
Spirit and Energy（1971）
Spirit and Mind（1982）

（２）パネンベルクの「宗教と科学」関係論の哲学的基盤

以下の議論は、芦名定道「キリスト教思想と形而上学の問題」、『基督教学研究』（京都大学基督教学会）第 24 号、2004 年、pp.1-23　の内容を部分的に採録した。

＜キリスト教思想と形而上学の問題＞

一　問題

本論文の目的は､キリスト教思想と形而上学との関わりについて考察を行うことである。しかし、もし形而上学が、「存在するものの、また実践と認識のもっとも根源的な諸条件と諸形式を論究する哲学的分野についての伝統的な名称である」(1) とするならば、キリスト教あるいはキリスト教思想が形而上学と何らかの関わりを有するのはいわば自明の事柄であって、この問題を論じる者は、そもそもこの問いをいかなる仕方で論じるかをまず明確にしなければならない。ここではまず、本論文の意図を説明するに先だって、キリスト教思想と形而上学の関係という問題の歴史的意義について簡単に言及し、その後、本論

文の問題設定を説明するという順序を取ることにしたい。

キリスト教思想と形而上学との関わりは古代のキリスト教神学形成期まで、あるいはヘレニズム世界における旧約聖書の解釈史にまで遡る。それは、従来ヘブライズムとヘレニズム、あるいは聖書的宗教とギリシャ的存在論という仕方で論じられてきた問題であり、いわゆる「在りて在る者」をめぐる問題群はその中心に位置する[(2)]——出エジプト記三章一四節のギリシャ語訳において「ある」という存在概念と神概念とが結合されたこと——。この点で、形而上学との関わりはキリスト教思想の根本に属すると言わねばならない。

もちろん、旧約聖書の「神の名」自体が、ギリシャ的存在論と容易に結合可能なものであるかは決して自明ではない。なぜなら、出エジプト記の文脈においては、「ある」という存在概念に伴う抽象度の高い思考方法と神の名とが結びつく発端が確認できると同時に、「あなたたちの先祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である主」という具体的表現が併置されることによってはじめて、神の名の全体が示されているからである。宗教思想の特徴は、論理学や形而上学との連関で展開される抽象度の高い思索が、具象的な神理解（象徴的あるいは隠喩的）と結合されている点にあると言えよう。本研究では、こうした宗教的思惟の特徴を念頭においた上で、隠喩的な宗教言語による具体性の面ではなく、普遍的な論理性へ向かおうとする形而上学的思惟の動向の方に注目したい。

形而上学との関わりについては、すでに多くの先行研究が存在しており、本研究で改めて、この問題を取り上げるにあたっては、その問題設定と意図について説明することが必要である。本研究で、「キリスト教思想と形而上学」という古典的問題を論じる意図は、現代の思想状況において、「宗教と科学」の関係を論じるための基礎論を構築するという点にある。つまり、宗教と科学との関係理解にとって、形而上学は決定的な位置を占めており、宗教と科学の関係論を十分な仕方で展開するには、形而上学的基礎が必要となるというのが、本研究の趣旨である。もちろん、構築されるべき形而上学の全体像を提示することは本研究の範囲をはるかに超える課題であり、本研究が意図するのは、将来宗教と科学の関係論構築を可能にするような仕方で、キリスト教と形而上学との関わりを再検討することにとどまる。したがって、本格的な議論は将来的な課題となるが、宗教と科学の関係論にとって形而上学的な基礎が必要であることについて、若干の説明を行いたい。

一九六〇年代以降の思想動向の一つとして、宗教と科学の対立図式の克服への取り組みを挙げることができるが、これについて、ティリッヒは次のように述べている。[(3)]

「宗教、科学、そして哲学の対立の時期は原理的には過ぎ去った。もちろん、より古い思想時代に逆戻りしてまだ生きているような人も存在してはいるが。我々は寛容の時代に生きている。しかしそれは満足のゆくものではない。なぜなら、それはお互いを認め合ってはいても、統一することはないからである。……我々は常に再統合の時期に向かって努力している。……協力は今日可能な事柄である。これは多くの場所において始められており、これがますます力をまして現実のものとなるという希望を私は表明したい」。

この場合に、ティリッヒが宗教と科学の再統合の基礎に位置づけているのが、哲学であり、「科学研究と神学との接点は、科学と神学の両者における哲学的要素の中にある。したがって、神学の特殊科学に対する関係は神学と哲学の問題になる」[(4)]と述べているとおりである。ここでティリッヒの言う哲学的要素とは存在論を意味し、本研究で形而上学として意図しているものに他ならない。つまり、宗教と科学との関係論の基礎は、宗教と

科学に共通する哲学的要素、すなわち存在論、形而上学であるというのが、本研究の中心的主張なのである。したがって、問題は、このような存在論あるいは形而上学とはいかなるものであるのかということになり、それは以下の各章のテーマに他ならない。こうした形而上学の再評価の具体的な動向としては、パネンベルクやギルキーの試みを挙げることが可能であるが、[5] 本研究ではとくにパネンベルクに注目することにしたい。

しかし、現代の思想状況において形而上学の問題を再考することは決して容易な作業ではない。というのも、現代思想は反形而上学的と言うべき思想動向によって規定されているからである。そこで、本論文の議論は次のようになる。まず現代思想における形而上学批判の内実を明らかにし、次にこうした状況を前提に形而上学の問題を取り上げている神学者としてパネンベルクの思想を検討する。最後に、こうした形而上学再考の試みが宗教と科学の関係論についていかなる展望をもたらすかを示すことによって、論を閉じたい。

二　現代思想における形而上学批判

三　形而上学再考の可能性

パネンベルク神学は、形而上学批判を基調とした現代の思想状況の下で、キリスト教思想と形而上学との関わりを積極的に論じている――形而上学批判を経て再び形而上学へ――。それは、キリスト教神学が合理的学問であることを断念するのでないかぎり、形而上学的思惟、全体性や普遍性をめざす思想形成（上昇的な思惟）は、不可避的であるとの見解に基づいている――もし、キリスト教神学が形而上学的思惟との関わりを喪失したとすれば、「信仰の神学的な自己解釈は、単なる神学者の主観的関与を表現するものに過ぎなくなる」（Pannenberg［1988a］, S.7）。形而上学との関連性を確保することは、神学が神学者の単なる主観的な信仰表明以上のものあるために必要な条件なのである――。これは本研究にとっても重要な意味を持っている。なぜなら、形而上学で問題化する全体性や普遍性という思想の場は、宗教と科学とが、そして諸宗教が、相互にきり結ぶ地点に他ならないからである。ここでは、『形而上学と神思想』（一九八八）に所収の「形而上学の終焉と神思想」「絶対的なものの問題」、そして『哲学　宗教　啓示、組織神学への寄与・第一巻』（一九九九）に所収の「意味経験、宗教と神の問い」（一九八四）によって、パネンベルクの形而上学論を検討することにしたい。[19]

まず、論文「形而上学の終焉と神思想」であるが、この論文でパネンベルクは、「哲学は人間の生に根ざす生の意味への欲求に対応している」（ibid., S.15）、「有限な諸対象とそれらが与えられる自我とを超えて＜上昇すること＞こそが、総体としての＜世界＞を、それゆえ、その中にあらゆる個々の諸対象がその場を持つことになる全体を、視野の内にもたらすのである」（ibid., S.16）と述べているが、これはパネンベルクの形而上学理解をよく示している。形而上学とは、人間理性に本性的に備わった「一者の思惟への上昇」（ibid., S.18）の欲求、つまり世界を有意味な全体として捉えたいという欲求（さらには、自らの生を有意味なものにしたいという欲求）に根ざしているのであり、人間は本性的に形而上学的なのである。これは前章で見たカントの命題の半面に他ならない。ただし、ここで注意しておきたいことは、パネンベルクは古い伝統的な形而上学への回帰を主張しているのではなく、現代の形而上学批判を経た新たな神学的思惟の再構築を目指している点である。

次に、形而上学の内容に立ち入るために、論文「絶対的なものの問題」を見ることにしよう。すでに論じたように、形而上学は世界という実在の統一性の理念に基づくものであるが、この論文ではさらに次のように議論が展開される。

「実在の統一性の理念なしには形而上学は存在しない。実在の統一性は、世界、コスモスとして、多なるものの、多様な個別的なものの秩序なのであるから、世界の統一性には、多なるものを統一性へと相互に秩序付け、相互に連関させる根拠の問いが結び付いている。」（Pannenberg［1988b］, S.20）

すなわち、形而上学は実在の統一性と同時に、その根拠の問いを含んでいるのであり、この形而上学の特徴は、前章で見た伝統的な形而上学（存在―神論）理解に合致している。

では、形而上学の核心と言うべき経験の多様性あるいは実在の統一性とは、どのような構造において成り立っているのであろうか。「主観性と主観外の実在との統一と差異は、経験意識の内で結び付いている」（ibid.）、「経験可能な実在の総体性の理念は任意の主観的な思想以上のものである。なぜならば、この理念は、何らかの形式において、経験される個々の対象を把握したり規定する条件だからである」（ibid., S.21）。この主張の前提は、「経験の諸対象は、このような対象の総体の部分として、別の諸対象との相違においてのみ＜或るもの＞である」（ibid.）という議論、つまり有意味な経験は全体と部分という枠組みにおいて可能になるという主張である。経験の有意味性が一定の連関（総体あるいは全体）における諸要素の間の関係性（類似と差異）によって可能になるという主張は、広範に承認された意味概念の規定であって、これを形而上学の再構築の出発点としている点に、パネンベルクの議論のポイントを見ることができるであろう。もちろん、問題はこの全体性とは何であるかであるが、パネンベルクの考える総体あるいは全体について検討する前に、後に有意味性と宗教との関わりを論じる際の問題、つまり総体あるいは全体に対するその彼岸（限界の彼方）の問題について、簡単に確認しておきたい。

「限界の思惟と共に、常に同時に限界の彼方にあるものもすでに思惟されている。たとえ、漠然とした仕方であっても」（ibid.）、「有限なものの把握がすべて無限なるものを含んでいるということは、シュライアーマッハーの『宗教講話』における宗教理論の根本思想である」(ibid.)。

限界の彼方という議論――経験の限界の意識には限界の彼方の意識が伴う――に関して、パネンベルクは、超越論的理念を統制的使用に限定するカント的立場より、ドイツ観念論あるいはシュライアーマッハーに近いとも言えるし、またいわゆるルター派的伝統における「有限なものは無限なものを含む」という原理に従っているとも言えよう。

以上を確認した上で、パネンベルク自身がいかなる仕方で形而上学を再構築しようとしているかについて、さらに検討してみよう。取り上げるのは、論文「意味経験、宗教そして神の問い」である。この論文で、パネンベルクは現代思想における形而上学批判を念頭におきつつ、形而上学を意味論の観点から再構築しようとする。それは、現代の精神状況において、意味の問いが決定的な意味をもつという認識に基づいている。すなわち、「意味空虚と意味喪失を前にした不安は、現代の生のテーマとして、意味の問いや意味の追求に関連している」（Pannenberg［1984］, S.101）。ここでパネンベルクが引き合い出すのは、ティリッヒ、フランクル、シュッツ、バーガー、ルーマンらであり、現代の問いを意味の問いと規定した上で、[20] 意味概念の規定へと議論は進められてゆくのである。

意味概念を論じるために最初に参照されるのは、現代の言語理論（意味―指示、語―文―テキスト、発話―解釈といった論点をめぐって展開される）である。[21]「語は本来その指示を文の内部において有している。その指示はそのときどきの文の連関から完全に切り離すことはできない」、「ここでわれわれは文連関における語の＜意味＞について語っているのである」（ibid., S.102）、「テキストの意味内実は語り手あるいは著者の意図にも解釈を通した意味付与にも還元できない」（ibid., S.104）。

こうした議論はそれ自体興味深いものであるが、本論文のテーマである形而上学（意味論としての）という観点から重要なのは、「言語の意味にとって重要なのは、語りの連関における部分と全体の関係性なのである」（ibid., S.103）との指摘である。つまり、先に全体あるいは総体と部分の連関として導入された有意味性の構造は、この論文では、まず言語に関して、語と文、文とテキストとの関係として説明されており、それによって全体や総体は十分明確に輪郭付けられることになる――語と文は、それぞれが部分と全体として関係づけられ、語の意味や指示は文という全体連関に依存している――。このように言語を出発点にすることによって、とかく形而上学につきまとう曖昧さが払拭されている点に、パネンベルクの立論の特徴を見ることができるだろう。

次にパネンベルクは意味論を言語から人間の経験へと拡張して行く。人間の経験（意味経験）に着目する理由は、ここにおいて宗教との関係が顕わになるからである。「言語的表現の意味構造から人間経験の有意味性の構造へと注意を向けるとき、意味経験と宗教との連関が視野にもたらされる」（ibid., S.105）。パネンベルクがとくに注目するのはディルタイであるが、その問題点は、「文や語りの連関による語の指示の制約性の観点を、言語的テキストの分析から経験構造の研究へと転用」 (ibid.)することによって、言語において確認された「全体―部分」構造はどうなるのかということである。少し長くなるが、関係個所を引用してみよう。

「他のすべての生から区別された自分自身の生の全体性について、わたしたちは直接経験の瞬間に特別な意識を有するわけではない。むしろ、自分自身の生の全体性だけではなく、実在一般の全体性が、感情においてわれわれへと現前してくるのである。それに対して、実在一般は、われわれの経験の地平として、あの感情に即した仕方で現前するのだが、それはきわめてあいまいな仕方においてである。実在一般のこのような漠然とした現前において、世界、自己そして神はまだ未分化である。この全体は個別的な経験においてのみ規定されるのである」（ibid., S.106）。

経験構造においても、全体が部分を規定する連関（地平）として位置づけられていることは、先に見た言語の場合と同様である。しかしここでは実在一般は感情において現前し（＝漠然とした仕方で感じ取られ）、世界、自己、神は未分化である言われる――個別的経験に対してその地平である全体は「漠然とした彼方」（ein vages Daüberhinaus）として現れる――。

確かに、「ディルタイは、規定されない無限の地平、つまりわれわれが感情において予期する全体を個別的経験の地平として生の全体性へ、それもまずは自分自身の生の全体性へと制限する」（ibid., S.107）と言われるように、ディルタイでは、経験を構成する「全体―部分」構造は、個別的生に制限されるによって、なおも致命的な無規定さを免れている。しかし、問題はこの全体が個別的生から歴史へと拡張されることによって生じる。パネン

ベルクは、このディルタイの思惟の展開を、シュライアーマッハー（とくに、『宗教論』）との関連で説明しつつ、次のように論じている。

個別的生にとって、全体と部分という意味構造がその有意味な経験を可能にしているように（経験の有意味性の構造）、歴史的連関についても同様の考察が成り立つと考えられる――「それは、歴史の諸出来事にも妥当する」（ibid., S.109）――。歴史の出来事の意味は、それが全体としての歴史（歴史の全体）の部分として規定されることによって可能になる。もちろん、歴史に関しては、一定の歴史的立場（視野）によって制約された解釈を通してはじめて、歴史の諸出来事の意義が把握可能になるなど、歴史固有の問題を論じることが必要になる。しかし、最大の問題は、われわれが歴史の諸出来事や歴史的生の固有の意味を完全かつ全体として理解できるのは、「歴史の終わりからのみ」であるとされる点である。「歴史の終わりにおいてのみ、われわれの意味意識の真理あるいは非真理については最終的に決せられるのである」（ibid., S.110）。というのも、歴史の全体が問われるのものとなるには、「歴史の終わり」（歴史の彼方）が先取りされねばならないからである（歴史の出来事→歴史の全体→歴史の彼方）。この地点においては、議論は哲学的な歴史理論、歴史解釈学とは質的に別の問題領域に移行することになる。それは、終末論という問題領域であり、信仰の領域と言わねばならない――「現在の意味経験の明証さは、信仰という形式、意味の先取り的叙述という形式をとる」（ibid.）――。

こうして「全体―部分」構造は、「宗教経験において問われるべき全体（実在の全体性）の彼方としての終末論的地平―歴史の出来事あるいは個別的生」という形態までに拡張され、個々の出来事は歴史の全体を規定する終末論的地平において、その最終的な意味を獲得することになるのである。パネンベルクの神学的思惟の中で形而上学とキリスト教神学とが積極的に関わり合うのはまさにこの地点であり、これによって、ディルタイの経験の意味構造の分析が、「全体―部分」構造に即して生起する形而上学的上昇と結びついており、そしてさらに宗教経験の領域とも接続することが示された。それは、実在の全体へアプローチする際に、伝統的な存在論の場合のように存在一般を直接論じるのではなく、言語の意味分析からはじまり、日常性（経験）の有意味性の構造を経て、歴史過程の全体を、そして最終的には終末論的地平を展望する道（「全体―部分」構造に即した形而上学的上昇）を辿るものである。

以上のパネンベルクによる形而上学の再構築は、ともすれば曖昧なままにとどまる「全体性」という問題を明確化する試みとして一定の評価が可能であり、ここに、先に見た認識レベルでの形而上学批判に応答しつつ形而上学を再構築する可能性が確認できるのである。近代の形而上学批判を経た形而上学の可能性は、おそらく、経験の有意味性の分析の内に見出されると言えよう。もちろん、問題が終末論や信仰に移行したことにより、別の曖昧さ、別の問題性が生み出されたことも否定できない。[22] しかし、本論文としては、現代の思想状況で形而上学を再構築する場合に、意味論（経験の有意味性の構造分析）という方向付けが得られたことを確認して、ここでの議論を終えたい。

四　展望

＜注＞

(1) *Religion in Geschichte und Gegenwart. Vierte Auflag Band5 L-M*, Mohr Siebeck 2002, S.1171

形而上学の基本性格に関して、ハイデッガーは、『カントと　形而上学の問題』(Martin Heidegger, *Kant und das Problem der Metaphysik*, Vittorio Klostermann 1973(1929)) におい　て、次のように説明している。「アリストテレス自身が述べているところによれば、＜　第一哲学＞のまさに本質規定の内に、著しい二重性が見られる。形而上学は、存在する　ものの存在するものとして認識であると同時に、そこから存在するものが全体において　規定される存在するものの卓越した圏域の認識なのである」(ibid.,　S.7)。「形而上学は、　存在するものそれ自体としての、そしてまたその全体における根本的な認識である」　(ibid., S.8)。

(2) 次のティリッヒの著書は、聖書的宗教と存在論的思惟との対立という問題を包括的に論じたこの種のテーマについての古典的文献である。

Paul Tillich, *Biblical Religion and the Search for Ultimate Reality* 1955, in: *Paul Tillich. MainWorks 4*, de Gruyter　pp.357-388

また、「在りて在る者」をめぐる研究は、日本においてもすでに多くの蓄積を有しており、以下に挙げるものはその一部分にすぎない。

有賀鐵太郎『キリスト教思想における存在論の問題』創文社　1969年（1981年）

山田　晶「一　在りて在る者　－序説－」、『在りて在る者』創文社　1979年　3-17 頁

(3) Paul Tillich, Religion, Science, and Philosophy 1963, In: J. Mark Thomas（ed.), *Paul Tiilich. The Spiritual Situation in Our Technical Society*, Mercer　1988, p.172

「宗教と科学」の関係理解をめぐるキリスト教思想の新しい動向は、現代のキリスト教思想の中で広範に確認できる。その中でも、マクグラスは注目に値する。

Alister E. McGrath, *A Scientific Theology. Vol.1: Nature*（T&T Clark　2001), *Vol.2: Reality*（Eerdmans　2002), *Vol.3:Theory*（T&T Clarck　2003）

(4) Paul Tillich, *Systematic Theology. Vol.One*, The University of Chicago Press　1951, p.18

(19) 本章におけるパネンベルクからの引用は、次の略記号で行うことにする。

１．Wolfhart Pannenberg, *Metaphysik und Gottesgedanke*, Vandenhoeck & Ruprecht　1988

a. Das Ende der Metaphysik und der Gottesgedanke（=Pannenberg［1988a］）

b. Das Problem des Absoluten (=Pannenberg[1988b])

２．W. Pannenberg, Sinnerfahrung, Religion und Gottesfrage　(=Pannenberg[1984]), in: *Beiträge zur Systematischen Theologie. Band 1. Philosophie, Religion, Offenbarung* Vandenhoeck & Ruprecht　1999

本論で論じるパネンベルクの形而上学論は、「啓示論についての教義学的諸命題」に遡る彼の神学構想の中に位置づけられねばならない（Wolfhart　Pannenberg, Dogmatische　Thesen　zur　Lehre　von　der　Offenbarung　（＝Pannenberg［1961］), in: Wolfhart Pannenberg　(hrsg.), *Offenbarung als Geschichte*, Vandenhoeck & Ruprecht 1961　S.91-114)。それは、　歴史における神の間接的自己啓示という啓示理解と、この神の自己啓示の普遍史が有す　るギリシャ的なコスモスの全体性に対する優位の主張とを中心にしたものであるが、こ　れはギリシャの形而上学的枠組みをキリスト教的普遍

史の構想（全体性としての歴史、　キリストの出来事における終末の先取り）に基づいて再構築する試みに関連している。

(20) 現代の意味の問いに対してキリスト教が答え得るのかという点について、パネンベルクはこの論文で、次のように論じている。

「形式的な有意味性を越えて実際に人間の生の積極的な意味充実を指し示すような宗教的伝承の意義については、すべての日常的な意味経験に暗に含意された包括的な意味連　関――これは、個々の意味を根拠づけているのであるが――への関係性を、その宗教的　伝承が統合できるかによって示されねばならない」（Pannenberg［1984］, S.111）。

つまり、意味喪失の危機にある現代人の意味経験に対して真に意味の根拠となる包括的意味連関をキリスト教的伝承が実際に提示できるかが、キリスト教が現代の意味の問　いに対する答え得るかのポイントとなっているのである。

(21) パネンベルクは、一九八〇年代以降の神学構想のいわば基礎論とも言える『科学論と神学』で、解釈学を中心に意味論について、より詳細な議論を行っている。

Wolfhart Pannenberg,　*Wissenschaftstheorie und Theologie*, Suhrkamp 1977, S.157-224

(22) 信仰や終末論といった事柄をもちだす場合、しばしばその議論は思想家の主観的な信念の表明に過ぎないとの印象を与えがちであるが、パネンベルクは、その初期の神学的　思索から一貫して､信仰を単なる主観的飛躍や決断に還元することに反対している。「歴　史的啓示は神性の特殊な顕現とは異なって、見る目をもつすべての人間に対して開かれ　ている。それは普遍的な性格を有しているのである」（Pannenberg［1961］, S.98）。これ　は、神学的命題の仮設性という論点に関わるものである。これについては、次の文献を　参照。

深井智朗　『超越と認識　20世紀神学史における神認識の問題』創文社　2004年、特に171-174頁